

剣道における正面打ちの正確性について

98-104 学校教育教員養成課程

松村 麻未

I 緒言

剣道は定められた打突部位をお互いが竹刀を用いて有効打突を競い合う競技である。剣道の打突は、ただ当たればいいわけではなく、有効打突になるためには①打突部位、②竹刀の打突部位、③打突の強さが条件となっており一つでも欠けてはならない。しかし、有効打突になるためには、まず打突部位に当たることが絶対条件となっており、当てることができない場合は有効打突の条件を満たすことはもちろん、できないのである。そこで本研究では、この絶対条件である打突部位に正確に当てるということに着目し、基本動作である正面打ちについて経験年数別（競技成績別）に、三つのグループに分け、以下のことについて検討する。一つ目は、各グループにおける疲労度の違いによる正確性について、二つ目は各グループ間での正確性の比較、三つ目は各グループにおける疲労度の違いによるタイムについて、四つ目は各グループ間でのタイムの比較について検討することを目的とした。

II 実験方法

1. 被験者

K 大学剣道部員の女子6名（平均年齢 19.6 ± 0.9 歳、剣道歴 7.6 ± 5.4 年、段位 1.8 ± 1.1 段、身長 158.8 ± 2.2 cm、体重 52.8 ± 4.8 kg）と、同じく K 大学ではあるが剣道部に所属していない体育科専攻生女子3名（平均年齢 20.0 歳、剣道歴 0 年、段位 0 段、身長 163.7 ± 1.3 cm、体重 56.3 ± 1.2 kg）であった。

2. 実験方法

剣道経験年数 12.7 ± 2.5 年で全国大会に出場している上級者グループを A グループ、大学から始めた剣道経験年数 2.5 年の中級者グループを B グループ、剣道経験年数がないグループを C グループとする。10人の補助員が 160 cm の高さで打ち込み棒を持って立つ。打ち込み棒は長さ 60 cm 太さ 2 cm の木の丸棒にカーボン紙を巻き、その上の中央に目立つ直線を引いた紙を重ねる。1セット目は竹刀を持たずに軽い準備運動後に10本連続で面を打ち込み、2セット目は竹刀を持ち面も付け少し汗をかく程度の運動後10本連続で面を打ち込む。3セット目は2分間の掛かり稽古の後10本連続で面を打ち込んだ。このとき、打ち始めから打ち終わりまでのタイムも計った。採点基準は、的の線から左右 0.5 cm 未満を10点、 0.5 cm の線上を9点、 0.5 cm から 1.5 cm の間を8点、 1.5 cm の線上を7点、 1.5 cm から 2.5 cm の間を6点、 2.5 cm の線上を5点、 2.5 cm から 3.5 cm の間を4点、 3.5 cm の線上を3点、 3.5 cm から 4.5 cm の間を2点、 4.5 cm の

線上を1点、それよりも外れたものを0点とする。連続で打ち込んだ10本の合計を得点として記録する。その数字で基礎的統計値を求めた後、二要因分散分析法を行った。有意差が認められた場合、多重比較検定を行った。

Ⅲ 結果及び考察

(1) 各グループにおける疲労度の違いによる正確性

上級者であるAグループの1セット目の平均点は74.3点、2セット目は74.3点、3セット目は61.3点であり、有意差は認められないが3セット目に点数が下がっており、これは一時的疲労によりフォームが崩れ正中線にそって竹刀を操作する事が困難になったからだと考える。中級者であるBグループの1セット目の平均点は68.7点、2セット目は46点、3セット目は56.3点で有意差は認められなかった。初級者であるCグループの1セット目の平均点は44.3点、2セット目は47点、3セット目は45.3点で有意差は認められなかった。B、Cグループとも各セットにおいて点数にばらつきがあり正確に当てること自体難しいということが考えられる。Aグループは疲労度が大きくても小さくても、中心付近を当てておりB、Cグループは疲労度に関係なく正確に当てられないことが分かる。すなわち、各グループにおいて疲労度が大きくても小さくても、正確性に差が生じなかったと考えられる。

(2) 各グループ間での正確性の比較

Aグループの平均点は70点、Bグループは57点、Cグループは45.6点であり、多重比較検定の結果よりAグループとBグループ及びBグループとCグループの間には有意な差はないが、AグループとCグループの間には有意な差が認められた。すなわち、上級者になればなるほどねらった箇所にあてることができ初級者ほど竹刀操作がうまくできずねらった箇所にあてることが困難だと考えられる。

(3) 各グループにおける疲労度の違いによるタイムの変化

上級者であるAグループの1セット目の平均タイムは8.66秒、2セット目は7.99秒、3セット目は9.78秒、中級者であるBグループの1セット目の平均タイムは8.9秒、2セット目は8.61秒、3セット目は10.61秒である。初級者であるCグループの1セット目の平均タイムは13.77秒、2セット目は10.09秒、3セット目は10.37秒であった。A、Bグループとも体が温まった2セット目が最もタイムが速く、体が十分に温まらない1セット目と疲労度が大きい3セット目のタイムが遅くなる傾向がある。Cグループは剣道未経験者であり連続で面を打つ動作に慣れていないため1セット目のタイムが遅かったと考えられる。全体的に疲労度が大きいと体力が消耗し動きが鈍くなる。ある程度、汗をかいて体を温めることが必要である。

(4) 各グループ間でのタイムの比較

上級者である A グループの平均タイムは 8.81 秒、中級者である B グループは 9.38 秒、C グループは 11.41 秒であり、多重比較検定の結果より初級者と上級者及び初級者と中級者の間には有意な差は認められたが、上級者と中級者の間には有意な差が認められなかった。このことより足さばきが上手な上級者ほどスピードにのって敏速に打撃することができると考えられる。

IV 結論

上級者である A グループの正面打ちにおける正確性は高く、中心からのずれが小さい。疲労度が大きくても小さくても、中心からのずれには大きな差はなく中心付近に当てているが、疲労度が大きくなると疲労前に比べて、少し左右に竹刀がぶれ、中心からのずれが広がるという傾向がみられた。すなわち、竹刀を敏速に自由自在に操作する筋力などの体力と技術とともに養うように練習すれば、さらに正確に打突できる。また、疲労度が大きい 3 セット目はタイムが遅くなり、軽く汗をかいだ 2 セット目のタイムが最も速くなる。すなわち、しっかり準備運動することが必要だといえる。

中級者である B グループの正面打ちにおける正確性は、疲労度に関係なく中心からのずれが大きい、特に疲労度が大きい 3 セット目は竹刀操作が乱れ、左右に大きくずれている。タイムについては全体的に上級者より遅いが、上級者と同様、3 セット目が最も遅く 2 セット目が最も早かった。

初級者である C グループにおいても中級者と同様、疲労度に関係なく中心からのずれが大きい。また、左右のぶれは上級者、中級者に比べてはるかに大きく竹刀操作がうまくできていないことがわかる。タイムについては、上級者、中級者とは異なり、1 セット目が最も遅かった。これは、連続で面を打つという動作に慣れていないため遅くなったと考えられる。2 セット目、3 セット目においては上級者及び中級者同様、疲労度が大きいほどタイムが遅くなった。

V 今後の課題

本研究の結果から、上級者になればなるほどねらった箇所には正確に打突できることが分かったが、次は「竹刀の打突部位」や「竹刀の強さ」などにも着目し、その打突が「有効打突」になるかどうかを検討したい。

<参考・引用文献>

- 三橋 秀三 : 剣道 大修館 1972
恵土 孝吉 他 : 剣道のスキルテストに関する基礎的研究
金沢大学教育学部教科教育研究 第24号 1998
中野 八十二 : 剣道の面打撃動作に於ける鍛錬度の相違
東京教育大学体育学部紀要 第2巻 1962

他